少年の日の思い出 ⑹

ヘルマン・ヘッセ
高橋 健二 訳

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

現在	客（僕）の回想	
	「僕」が十歳ぐらいの頃	「僕」が十二歳ぐらいの頃
「私」は書斎で客の友人にちょうの収集を見せた。友人は「私」に、彼の少年の日の思い出を語り始めた。	**ちょう集めに対する「僕」の熱情** 「僕」は十歳ぐらいの頃、ちょう集めのとりこになった。今でも美しいちょうを見ると、あの頃の熱情を感じる。 **青いコムラサキをとらえた「僕」とエーミールの批評** エーミールは非の打ちどころがないという悪徳をもっており、あらゆる点で模範少年だった。「僕」はエーミールを妬み、嘆賞しながら憎んでいた。 あるとき「僕」は珍しい青いコムラサキを手に入れ、それをエーミールに見せた。エーミールからこっぴどい批評を受けた「僕」は、二度と彼にちょうを見せなかった。	**クジャクヤママユを盗む「僕」** エーミールがクジャクヤママユを手に入れたといううわさを聞いた「僕」は、すっかり興奮し、エーミールの部屋に行った。逆らいがたい欲望を感じた「僕」は、生まれて初めて盗みを犯した。「僕」は大きな満足感のほかは何も感じていなかった。 **良心が目覚め、不安に襲われる「僕」** 誰かが自分の方に上がってくるのが聞こえた「僕」は、良心が目覚め、自分は盗みをした、下劣なやつだということを悟った。「僕」は、見つかりはしないかという不安に襲われ、クジャクヤママユをポケットにつっ込み、家へと歩いた。 「僕」はクジャクヤママユを戻そうとエーミールの部屋に引き返したが、クジャクヤママユはつぶれてしまっていた。 **エーミールへの謝罪** 家に帰った「僕」は母に一切を打ち明けた。母に促された「僕」は、エーミールのもとを訪れた。 「僕」はエーミールに自分がクジャクヤママユを台無しにしたことを話し、埋め合わせをしようとするが、エーミールは冷然と、正義を盾に、あなどるように立っていた。 **ちょうの収集をつぶす「僕」** 一度起きたことはもう償いのできないものだということを悟った「僕」は、家に帰ると、ちょうを一つ一つ粉々に押しつぶしてしまった。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文を前半（現在）と後半（回想）に分けたとき、前半部分の語り手は誰か。適当なものを選びなさい。

ア 客　イ 友人　ウ 「彼」　エ 「私」

〔　　〕

(2) 次の各文を、本文の流れに沿って並べかえなさい。

ア 逆らいがたい欲望を感じた「僕」は、クジャクヤママユを部屋から持ち出し、大きな満足感を感じた。

イ エーミールがクジャクヤママユを手に入れたといううわさを聞いた「僕」はすっかり興奮してしまった。

ウ エーミールの部屋に入った「僕」は、クジャクヤママユの斑点（はんてん）を見たいという思いを抑（おさ）えられず、留め針を抜（ぬ）いた。

エ 良心が目覚め、自分が盗みをした下劣なやつだということを悟った「僕」は、見つかりはしないかという不安に襲われた。

〔　　→　　→　　→　　〕

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア エーミールは非の打ちどころのない模範少年で、「僕」は彼を妬ましく思っていた。

イ エーミールに自分のコムラサキを見せた「僕」は、彼のもっともな批評に感心した。

ウ 「僕」がエーミールに事情を話すと、エーミールは激して「僕」をどなりつけた。

〔　　〕